

学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 関 駿平 君

論文題目 都市で酔う／都市に酔う：オーセンティックバーの社会的世界とその維持

審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員

博士（文学） 近森 高明

副査 前亜細亜大学都市創造学部教授、慶應義塾大学名誉教授

博士（社会学） 有末 賢

副査 関西大学社会学部教授

修士（文学） 永井 良和

副査 慶應義塾大学法学部教授・社会学研究科委員

博士（社会学） 澤井 敦

I 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

目次

はじめに——とある夜

第一部 オーセンティックバーをいかに研究するか

第1章 序論——なにを、なぜ、いま、ここで問うのか

1-1: 研究の背景

1-2: 研究の目的

1-3: 研究の方法

1-4: 基本的な活動

1-5: 流れゆく時間

1-6: 常連客

小括——オーセンティックバーを研究するということ

第2章 先行研究の検討と本研究における視座の構築

本章の目的

2-1: 都市社会学における認識の問題とナイトタイムエコノミー

2-2: 社会的世界とそのヴェール

2-3: H. S. Becker における世界と調査

2-4: 3つの次元と調査

第二部 オーセンティックバーとはなにか

第3章 アーキテクチャとマテリアル

本章の目的——建築空間／物質としてのオーセンティックバー

3-1: アーキテクチャ

3-2: マテリアル

3-3: モノによる演出

	小括——オーセンティックバーとはいかなる空間か
第4章	両義的つながり
	本章の目的と位置付け——結合と分離の混在
	4-1: オーセンティックバーにおけるつながり
	4-2: 結合
	4-3: 分離
	小括——つながりの両義性
第5章	歴史を紡ぐ
	本章の目的
	本章の視座と方法——制度の発展への着目
	5-1: バー文化の到来 (1860s～1920s)
	5-2: 「本格的」——「オーセンティック」の萌芽 (1920s～1940s)
	5-3: 「色眼鏡」との戦い (1940s～1990s)
	5-4: 「オーセンティック」の再発見 (1990s～2020s)
	小括——日本のバー文化はいかに「オーセンティック」となったのか
第三部	オーセンティックはいかに維持されていくのか
第6章	「バーテンダー」になる
	本章の目的と位置付け——「バーテンダー」という労働のキャリア
	本章の方法
	6-1: 出会う——「バーテンダー」を志すきっかけ
	6-2: 参入する——「バーテンダー」になるためには
	6-3: 修行する——カウンターに立つために
	6-4: 磨く——美酒を目指して
	6-5: 独立する——東京で生きる
	小括——「バーテンダー」として都市に生きる
第7章	店内の秩序とその揺らぎ
	本章の目的と位置付け——閉じつつ開くこと
	本章の方法
	7-1: マナー／ルールが存在
	7-2: 誰が入店するのか
	7-3: 対処する
	小括——店内の秩序はいかに維持されているのか
第8章	酔いゆく身体
	本章の目的と位置付け——社会的陶酔をまなざすために
	オーセンティックバーにおける「酔い」
	本章の視座と方法
	8-1: コントロールの技法
	8-2: 酔っ払う——陶酔する身体／迷いゆく理性
	8-3: 陶酔経験がもたらす帰結
	小括——オーセンティックバーの陶酔経験と快楽
第9章	終章——都市で酔う／都市に酔う
	9-1: オーセンティックバーとはなにか
	9-2: オーセンティックバーはいかに維持されているのか
	9-3: 都市で酔う／都市に酔う

9-4: 本研究の限界や展望

補論

補論①: 東京におけるオーセンティックバーの全体像

補論②: 参与観察店舗の特性

補論③: オーセンティックバーの経営状況に関するデータ

おわりに

参考文献

II 本論文の概要

本論文の目的は、「オーセンティックバー」と呼ばれる文化が、東京を代表とする日本の都市においていかに発展し維持されてきたのかを、社会的世界論の視座から、バーテンダーや常連客などのアクターによる中心的な活動をはじめ、関連する協働の3つの次元——「世界内協働」「世界間協働」「アリーナ外協働」——に注目しつつ、参与観察、インタビュー調査、歴史資料調査などの複合的な方法を用いて明らかにすることである。

本論文は9つの章で構成されている。

第1章では、研究の背景・目的・方法が提示される。

まずは「オーセンティックバー」について、それが独自の「こだわり」の体系をもつ文化として日本の都市部を中心に発展し、維持されてきたことが示される。そのうえでオーセンティックバーの社会的世界について、それが①いかに生み出されたのか（＝歴史的な問い）、②いかなる様相を示しているのか（＝現状の問い）、③問題状況にいかに対処するのか（＝文化の維持にかかわる問い）という細分化された問いが示される。

つづけて、本研究で用いられる調査方法が紹介される。店舗での参与観察は2020年以降で約250回にのぼり、そのうち継続的な参与観察を実施したのは10店舗である。インタビュー調査はバーテンダー32名に対して1名2時間ずつ、半構造化インタビューの形式でおこなわれた。

第2章では、H. S. Beckerの社会的世界論を参照しつつ、オーセンティックバーの世界に迫るための視座の構築がなされる。

ここではBeckerの社会的世界論の入念な学説史的検討を踏まえて、社会的世界の協働の3つの次元——①世界内協働、②世界間協働、③アリーナ外協働——が抽出される。社会的世界とは、特定の空間でアクターが資源を活用しつつ活動を反復するなかで、規範を生み出してゆく経験的領域である。①世界内協働とは、調査対象となる社会的世界の中心的活動をめぐる協働である。②世界間協働とは、社会的世界がサブ世界に分化してアリーナが生成した状態において、社会的世界同士のあいだで展開される協働をさす。そして③アリーナ外協働とは、「因習的」価値観をもつアリーナ外部との協働をさす。

第3章では、オーセンティックバーの店舗空間がいかなる空間的・物質的特性をもっているかが、アーキテクチャとマテリアルという視点から記述・分析される。

モノが人間の行動を特定の方向に誘発・抑制する局面に着目する、近年のマテリアリティをめぐる議論を参照しつつ、バーカウンター・バックバー・バックヤードなどのアーキテクチャならびに酒瓶・グラス・おしぼりなどのマテリアルが、いかに店舗内での基本的な活動を支えるかを描き、さらには音・香り・色など感覚面での特徴、客側とバーテンダー側の可視範囲などが詳細に記述・分析される。その結果、店舗空間を構造化する原理として「バーカウンター中心主義」「客とバーテンダーの非対称的な身体への制約」「審美性の原理」という3点が導き出される。

第4章では、オーセンティックバー店内でのコミュニケーションのあり方が、つながりの両義性という視点から検討される。

従来の飲酒文化研究では、飲酒による共同性の強化という面が重視される傾きがあったことが指摘されたのち、G. Simmel 的な「結合」と「分離」の両モメントを含む、つながりの両義性という視点から、店内空間でのコミュニケーションのあり方が詳細に記述・分析される。話題にはいくつかの類型やコードがあること、店内のマテリアルが会話のきっかけになること、客同士を結びつけ・切り離す局面ではバーテンダーが媒介の役割を果たすこと、等々の特徴が明らかにされると同時に、店内空間では「結合」と「分離」が入り混じった両義的な関係性が生きていることが示される。

第5章では、日本バーテンダー協会の成立と変遷を中心に、オーセンティックバーという社会的世界の制度化過程を歴史的にたどるなかで、「オーセンティック」という価値が形成されるプロセスが明らかにされる。

シカゴ学派の自然史的方法を参照しつつ、日本バーテンダー協会の会誌を主要な資料として描き出されるのは、1920年代のカフェ全盛期に、本格志向のバーテンダーたちが性的な営業形態に対抗するかたちで協会を設立したのち、戦争を経て、50年代から60年代のチェーンバー・マンモスバーの登場、80年代のカフェバー隆盛などのバー文化の時代的変遷のなかで、自身が「問題」とみなす営業形態や世間からのネガティブな視線に対抗しつつ、独自の価値意識を形成していくプロセスである。協会によるカクテルブックの刊行や「バーテンダー十戒」の制定、カクテルコンペティションの実施やミスターバーテンダーの表彰などは、技術の向上とともに「洗練」「上品」「規律」といった価値の浸透をめざす動きである。これらはバーテンダーたちが自身の社会的世界の存続にかかわる問題状況に対処してきた過程であり、「オーセンティック」という価値は、この対処の履歴のなかで形成されてきたことが示される。

第6章では、労働者としてのバーテンダーのキャリアのあり方が、32名のバーテンダーを対象とするインタビュー調査をもとに描かれる。

具体的には、バーの世界との出会いのパターン、各種の入職ルート、(酒屋・氷屋などとの協働を含む)一日の作業ルーティン、労働環境、休業時代における営業後の練習や勉強、カクテル技術を磨くプロセス、そして(借り入れ・テナント探し・店舗デザインなどを含む)独立に至るステップが詳述される。なかでもバーテンダーの「こだわり」の中核をなすカクテル技術については、各自が理想とする味にたどり着くための「論理」が重要であること、そしてまた、その技術は、他から独立した固定的なものではなく、素材との共存、美しさとの共存、経営を成立させる時間的条件との共存という、複数の要素との共存のなかで組み立てられるものであることが示される。

第7章では、店側の一見客に対する扱いにフォーカスしつつ、店内の秩序がいかに維持されているかが記述・分析される。

社会的世界としてのオーセンティックバーにとって、新規客を迎え入れることは経営上重要だが、その一方で、独自の規範をもつ店内秩序を守ることも必要である。その点、閉じることと開くことのジレンマを、文化的仲介者としてのバーテンダーがいかに処理しているかが、「よそ者」としての一見客の扱いから分析できる。バーテンダーは一見客の振る舞いを観察し、①バーに慣れているか(=規範の内面化状況)、②バーに慣れようとしているか(=メンバーシップ志向)、③他の客に迷惑をかけないか(=店内の活動への影響)を見極めたうえで、適切な対処をおこない、ジレンマの両立を図っていることが明らかにされる。

第8章では、オーセンティックバーにおける「酔い」のあり方について、社会的陶酔ならびにコントロールの技法という観点から検討がなされる。

酩酊/覚醒という二極でとらえてきた従来の飲酒文化研究に対して、「酔いゆく」プロセスを問うことで、社会的陶酔の次元を扱うことができる——このような着想のもと、マリファナの「楽しみ」は薬理作用には還元されず、集団的解釈を含む学習過程が必要だとした Becker を

参照しつつ、バー文化で推奨される「ほどよく酔う」ことがいかに達成されているかが、オートエスノグラフィーをもとに探究される。その結果、酔いの状態を見極めるバーテンダーの存在や、どのカクテルをどの順番で飲むかの「ルート」を確立するといったコントロールの技法によって、「ほどよく酔う」ことが集団的に達成されていることが明らかにされる。

第9章では、結論として、これまでの議論で明らかになった知見が整理され、その意義が確認される。

社会的世界の協働の3つの次元という視座から、あらためて整理すると、①世界内協働という次元では、バーテンダーや客たちの基本的な活動（第1章）、活動を支えるアーキテクチャやマテリアル（第3章）、結合と分離が融合するコミュニケーション（第4章）、「ほどよく酔う」ことの集団的達成（第8章）が明らかにされ、②世界間協働という次元では、店舗間ネットワークに依拠したバーテンダーのキャリア（第6章）、制度としての協会組織と関連業界との協働（第5章）が示され、③アリーナ外協働という次元では、「問題」的な営業形態や否定的視線に対抗しつつ独自の価値を形成した過程（第5章）や、一見客という「よそ者」に店舗の側がいかに対処し、閉じつつ開くことのジレンマを処理しているか（第7章）が明らかとなった。

最後に、以上を踏まえて、オーセンティックバーという社会的世界（＝文化）は、都市が背景的舞台（＝都市で酔う）となって維持されると同時に、都市が、社会的世界の内的な論理そのものに影響を及ぼす——生態学的効果（店舗同士および関連施設との空間的近接性による効果）や匿名性のなかでの「演技の精神」や審美性の追求などの点で——かたちで（＝都市に酔う）維持されていることが示される。

III 本論文の評価

近年、都市・地域社会学の分野においては、比較的若手の研究者を中心に、基本的枠組みとしての「地域」や「コミュニティ」の概念を再考しつつ、従来のように「地域」の総体的な把握をベースに「文化」をとらえるのではなく、相対的に自律した領域として「文化」をとらえる方向性が出てきている（武岡暢『生き延びる都市——新宿歌舞伎町の社会学』2017年、武田俊輔『コモンズとしての都市祭礼——長浜曳山祭の都市社会学』2019年など）。本論文は、日本の「オーセンティックバー」という独自の文化と歴史をもつ社会的世界を対象として、それが都市においていかに発展し、維持されてきたのかを体系的かつ多次元的に描きだすものであるが、それは同時に、以上のような動向を引き受けつつ、「文化」の内的記述からいかに「都市的なもの」を導出できるかを探る、理論的・方法論的な課題に挑戦するものでもある。その点で本論文は、社会的世界論を視座とするオーセンティックバーの体系的研究であると同時に、オーセンティックバーの社会的世界の記述をとおした、都市・地域社会学の理論的・方法論的更新をもくろむ研究としても位置づけられる。

本論文のタイトルである「都市で酔う／都市に酔う」は、オーセンティックバーの社会的世界について、その内的な秩序や論理を記述することと、当の社会的世界の成立に影響する都市システムとの関係性を記述することという、本研究のターゲットの二重性を体現している。前者の水準では都市は、オーセンティックバーという社会的世界（＝文化）の背景的舞台にすぎない（＝都市で酔う）が、後者の水準において都市は、社会的世界の内的な論理そのものに影響を及ぼす（＝都市に酔う）。

この二重性を扱ううえで、本論文では、「文化」の内的記述をベースとする「都市文化的視点（urban cultural perspective）」をとりつつ、帰納的な問いの設定により、結果として都市的な諸力を見出すという方向性が模索される。すなわち都市効果をもたらす「都市的なもの」を独立変数としてアプリアリに前提するのではなく、文化の内的記述から出発しつつ、そ

の文化の内的論理に浸透している「都市的なもの」を遡及的・逆算的に導出するという方法論的な実験が、試みられることになる。

本論文で Becker の社会的世界論が参照されるのも、それが上記のような方向性を支える視座を提供してくれるからである。Becker の社会的世界論は、近年では、芸術を個人的営為ではなく集団的な協働の産物とみなす『アート・ワールド』の翻訳（2016 年）などによりしばしば参照されているが、方法論についての整理された反省的記述がなく、概念構成が曖昧である点が批判されている。それゆえ Becker のアイディアを実証研究で「使える」ものにするには、背景となる影響関係ならびに彼自身の調査実践をたどり、アイディアに結実した理論的エッセンスを抽出し、再構成する必要がある。

以上のような関心のもと、第二シカゴ学派における E. C. Hughes や H. Blumer からの影響を詳細にたどりつつ、Becker 自身の調査研究で実践的に用いられている方法論を慎重に検討するなかで、1) Blumer による自然主義的調査からの影響、2) A. Lindesmith の分析的帰納法からの示唆、3) 社会的世界を時間的なプロセスのなかでとらえる「自然史」的方法論からの影響、等々を指摘するとともに、4) 特定の活動を導き、協働を可能にするものとしての perspective 概念から convention 概念に至る、Becker 自身の概念的系譜を再構成したうえで、5) Becker が記述する社会的世界の協働の 3 つの次元を抽出し、これを本研究の認識・記述上の視座として提示している。

以上のような作業は、第二シカゴ学派をめぐる学説史的研究としても一定の意義をもつと同時に、社会的世界論を具体的な調査に「使える」ものに再構成している点で、調査方法論にも独自の寄与を果たすものと評価できる。

本論文の中核をなすのは、綿密なフィールドワークならびに多人数へのインタビューにもとづく、オーセンティックバーの社会的世界の重層的な記述である。2020 年以降だけでも約 250 回にのぼる参与観察は、店内での基本的活動、店舗空間の空間的・物質的特徴、店内コミュニケーションのあり方、協会組織を中心とする歴史、バーテンダーの労働とキャリア、関連アクターとの協働を含めた営業の実態、店内秩序の維持、集団的過程としての「酔い」、等々、オーセンティックバーの社会的世界についての多次元のかつ解像度の高い記述を支えており、その記述は、モノグラフという面だけでも十分な学術的価値をもつ。さらにバーテンダー 32 名に対する 1 名 2 時間ずつのインタビューの実施にもとづく、バーテンダーのキャリアをめぐる詳細な記述は、きわめて独自性が高く、示唆に富み、労働社会学的研究としても十分に通用する水準を達成している。

これらの調査の実施にあたっては、調査者自身の、粘り強く、柔軟なコミュニケーション能力も大いに寄与している。外部に対して閉鎖的なオーセンティックバーの社会的世界に入り込み、バーテンダーたちとのあいだで一定の信頼関係を築き、開店前の店舗の様子を見学させてもらったり、バーテンダー同士の懇親会にも参加させてもらったりし、さらには日本バーテンダー協会という組織にもアクセスを得て、貴重な会誌のバックナンバー（国立国会図書館にも欠号がある資料）なども参照させてもらえたことは、対象世界と時間をかけて深い関係性を築いてゆく、調査者のフィールドワーカーとしての高い能力を示すものである。

本論文の評価すべきポイントとして、以上のほかにも、1) これまでまとまった記述がなかったオーセンティックバーの制度史を体系的なかたちで描いていること、2) 建築社会学などを参照しつつアーキテクチャやマテリアルなど、物質と人間の相互作用も射程におさめた記述を展開していること、3) 「酔いゆくプロセス」という、身体性と文化が絡み合う次元を社会学的記述の対象に組み込んでいること、などがあげられよう。

しかし、本論文には課題もまた残されている。

第 1 に、本論文で用いられている社会的世界論の視座は、個々の店舗内の秩序や、組織の歴

史的成長プロセスなど、スケールの異なる水準をひとつの視座で統合的・体系的に扱うことができる利点がある一方で、複数のスケールが混同され、曖昧になるリスクもあるように思われる。じじつ、本研究の記述において「オーセンティックバーの社会的世界」というときに、各店舗の水準なのか、銀座などローカルな地域の水準なのか、日本バーテンダー協会など組織の水準なのか、あるいは組織を含めたオーセンティックバーという世界全体の水準なのか、曖昧に感じられる場面があった。また「アリーナ外協働」には、本研究で触れている側面（協会組織の対外交渉および店舗レベルでの「一見客」への対処）に加えて、より多様な側面があるのではないか。

第2に、本論文におけるオーセンティックバーの歴史の再構成は、日本バーテンダー協会の会誌を主要な資料とするものであり、組織中心的な視点から、自身の来歴を正当化するかたちで構成された歴史の物語を、さらになぞるような記述となっている点で、限界がある。本格派のバーがカフェーから発展・分離するかたちで生じたというのは、クリシェ的な物語だが、むしろ戦後のバーテンダーたちが、なぜみずからの歴史をこのような物語として描こうとしたのかを探る必要がある。あるいは、現在のオーセンティックバーにつながる系譜としては、たとえばホテルバーからの系譜なども強いように思われ、師匠－弟子関係から見直すなどの作業を踏まえることで、オーセンティックバーの歴史は別様にも描けるはずである。

第3に、社会的世界のなかでの相互作用が主要なフォーカスとなる以上、客側のインタビュー調査の対象者を増やし、もう少し客側の視点での記述を分厚くするべきではなかったか。バーテンダーへのインタビューが充実している分、客側（2名分）のインタビューが少ない点が気になる。関連して、オーセンティックバー文化のジェンダー的偏りについても、もう少し言及があるべきではなかったか。オーセンティックバーは、バーテンダー側も客側も、明確に男性に偏った社会的世界であり、その点でも女性バーテンダーや女性客に話を聞き、その社会的世界の多面的な構成を探ることが望まれる。

IV 審査結果

このようにいくつかの課題は残されているものの、本論文の学術的価値を損なうものではなく、審査委員一同は、本論文が博士（社会学）を授与するにふさわしい水準に到達していると判断する。